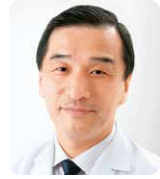


糖尿病治療の最前線

高齢者の糖尿病は 気持ちの持ち方が大事



担当医 久保 明先生
医学博士 糖尿病内分泌専門医
医療法人財団百葉の会 銀座医
院 院長補佐・抗加齢センター長

残りの人生を楽しむために、インスリン治療を選んだFさんのケース

患者氏名	F・C様	年齢	81歳	性別	女性	現病歴	2型糖尿病 単純性網膜症
------	------	----	-----	----	----	-----	--------------

Fさんが糖尿病と診断されてから、かれこれ25年以上になります。大変アクティブな方で、70代の前半まではスキーを楽しんでおられました。1回行けば10日間は雪山にいらつしゃるほど、本格的な趣味でした。普段から運動をされていることもあり、ずっと飲み薬だけでヘモグロビンA1c 7〜8%にコントロールして来られました。

しかしここ数年は、やはり年齢に伴う心身の衰えからスキーに行かなくなり、運動もあまりしなくなったそうです。数年前にはご主人が亡くなり、精神面でのストレスもあったのでしよう。だんだんと血糖値が上がってきて、最近の検査では242mg/dlにまで上昇。ヘモグロビンA1cもずっと9%以上と、かなりコントロールの悪い状態が続いていました。

81歳とご高齢ですが、女性の平均寿命からするとまだあと10年くらいはあります。そこで、残された時間をどう生きるかということをお話しさせていただきました。

Fさんのお気持ちはこうでした。「まだまだやりたいことがある。運動する気も残っている。血糖値をコントロールして、これからの人生をもっと楽しみたい」

そこで、インスリン注射の導入をご提案しました。最近の注射器は、操作も非常に簡単です。とはいえご高齢の方の場合、キャップが開けにくい、目盛りが読みにくいなどの問題がどうしても出てきます。しかし、Fさんはとてもしっかりしておられますし、インスリンへの理解もお持ちです。納得してインスリン注射を受け入れてくださり、今のところうまくコントロールできています。

「もういいや」とあきらめるか、「まだまだ頑張る」と前を向くか。高齢になるほど、その差が大きく心身の健康に現れる。そう実感したケースでした。